Vol.139　市史編纂だより

# わがまち歴史散歩

## 「穴織宮拾要記末」の作者また唐船が淵のこと

### ○作者名記載のない「穴織宮拾要記末」

中世末から近世初頭の池田の歴史を見ようとするとき「穴織宮拾要記」はいろいろなことを語ってくれます。

「穴織宮拾要記」は「本」と「末」の二冊で構成されています。「本」については、江戸時代初期の寛永17年（1640）3月神主であった河村三右衛門秦定幸がまとめたと明記されています。しかし、「末」にはこうした記述がありません。筆者は今でもあいまいなままなのです。記述のうち信用できる箇所はどこか、確認するためにはここを明確にする必要があります。

### ○「穴織宮拾要記末」の作者を探す

そもそも、「穴織宮拾要記」の「末」は、一つひとつの記述が全体としての体系性を持たず、前後が入り乱れています。

そこで、今回、これを古いものから新しいものへと順に並べ直し、その当時の神主として記述された名前と対比させ、「本」の記述ともあわせ読み直してみました。もちろん、前後の記述に矛盾がないか点検しながらです。こうして、作者として一番可能性の高い神主の名前を推測してみたのです。その結果、「本」を宝永2年（1705）に書き写したことを明記している縫殿佐定直が有力な候補として立ち現れてきました。

### ○代々の神主と経験の継承

この間、神主は右衛門佐定明―三右衛門定幸―左京佐（名不詳）―縫殿佐定直と続いています。

定明は、荒木村重が織田信長に反旗を翻した、天正の兵乱で大変な目にあわされました。すでに本欄でも記述したとおりです。その様子を次代の定幸は「本」の中で生き生きと描いています。

ところが、定明は信長没後の豊臣政権なかでも秀頼時代に御伽になるなど、豊臣家の信頼も受け、大坂へ出かけることも多かったと「末」では記載されています。その間、「本」の筆者定幸は次の神主として多くの体験を重ねたようです。もちろん、定幸の体験は二代後の定直にまで言い伝えられたとみるべきでしょう。そして定直も、定幸やそのあとの左京佐の話をよく聞いていたと思われます。

こうして、定直が宝永2年に定幸のまとめた「本」を書き写したとき「末」もまた書き始めたと推測するのが自然と思われます。記述は、はるか昔、古代の池田などに関する伝承的な部分と代々の神主が自ら体験した生々しい記述とが混じりあっています。ただし、「末」には近世後期、最後には明治維新時の法令も記載されていますので、定直以降も書き継がれたと考えるべきでしょう。

### ○唐船が淵の実在性

「穴織宮拾要記末」には、興味深い話がいろいろ書かれています。ここでは唐船が淵に関する記述を紹介しておきましょう。

「唐船が淵」とは、仁徳天皇・応神天皇時、呉国の織姫が日本に着き上陸したとされる伝承地であって、現在の池田には「唐船が淵」との石碑も建てられています。「穴織宮拾要記末」にも「唐船淵」と出てきます。

▲唐船が淵史跡の遠景

しかし、自然物としての淵は本当に存在したものでしょうか。「穴織宮拾要記末」にはこの淵に秀頼公がひと夏に三、四度も遊びに来て、池田・小戸庄・細川から網打ち・すい（水）入の得意な者が大勢出て御馳走したと記載されています。またこの淵は、底は岩一枚、「北ノ口出はずれ」から上へ二丁（約200メートル）あり、深さは水面から14～20丈（42～60メートル）。通行人には怖い存在だったが、寛永年中（1624～44）の猪名川洪水で土砂が埋まり、河原になったと書かれています。

淵の規模はさておき、猪名川の洪水で埋まったこと自体はありえることです。つまり、淵は実在していたからこそ、そこから「唐船が淵」の伝承も生じたのかもしれません。別の確実な史料を押さえつつ調べてみるべきでしょう。

（市史編纂委員会委員長・小田康徳）

**◆問い合わせは生涯学習推進課市史編纂☎754・6674**